

No.149

公民館だより

平成25年11月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

この夏を振り返る

由良地区公民館長 枝川 隆 亮

海、空、大気に息づく命の数々、それはこの地球に何が起きているのかを伝えてくれる大自然の使者と言えます。

今、この地球が私たちに悲鳴を上げているように聞こえます。

二〇一三年、日本列島をつぎ襲った記録的な猛暑、突然のゲリラ豪雨、そして住居や車などを空に巻き上げた竜巻、勢力の強い大型の台風も次々と発生し日本列島に接近しました。

非常に激しい風雨は、この貴重な日本大地を容赦なく削り、川や道路に氾濫しました。

気象庁は『平成25年は異常天候・異常気象と呼んでも良い』

と発表しています。

そんな異常気象は「生き物」の世界にも大きな影響を与え、この日本列島に異変をもたらしています。

まずはスズメバチ、その住み処はこれまで山や林の中と考えられていました。

しかし、学校の前や都市部に次々と確認されたオオスズメバチの巣、発見された巣の多くが大型化されていたと言います。

スズメバチは毎年全国で人が刺される被害が絶えず、死に至ることがある恐ろしい蜂と聞きます。あるはずがない所に巨大な巣、それは何を意味しているの

でしょうか。それは、今年の異常気象が深く関わっていると専門家は指摘しています。『今年のように気温が上がってたくさん昆虫やエサが発生すると数が増え始める』猛暑で蜂の数が増えたというのです。

北の大地の原風景を残す阿寒湖、その湖底を埋め尽くしていたのは居るはずのない外来種ザリガニ、その数推定で55万匹といわれ、湖の貴重な天然記念物を驚異にさらしています。

そんな外来生物が、この夏列島の各地で繁殖を続け、日本の生態系に深刻な影響を及ぼしています。

古都京都、私たちの心のふるさとに音もなく忍び寄る外来生物の恐怖、それは南米原産のアリ。

その攻撃性はすさまじく、在来種のアリを駆逐しようとしている。

また沖縄でも湖から引き上げられた網にかかっていたのは、不気味な外来種の魚ばかり。日本はなぜこんなことになっ

たのでしょうか。

沖縄石垣島近海では、凶暴なサメが大量に姿を現していました。

専門家が指摘するのは、台風の接近と、サメの意外な関係でした。

夏期に接近した過去3年間の台風数と駆除されたサメの数は比例している。台風が多い年ほど多くのサメが駆除されている。

台風による強い風で、海が攪拌されプランクトンのエサとなる床の栄養分が表面まで上がる。それを小魚が食べ、その小魚をサメが食べるという「海食物連鎖」があるとされています。

台風の発生、記録的な猛暑、ゲリラ豪雨、竜巻などはすべて地球温暖化が原因とされています。

今まで好き放題エネルギーを使ってきた人類、このままの状態だと10年後の日本の夏の毎日35度が平均で、40度を超える日もめずらしくないそうです。

私たちは少しでもエコに努め、CO2発生の減少化に努力しなければなりません。

行事報告

主事 磯田 充亮

◎六月十六日(日)

グラウンドゴルフ大会(個人戦)「はまの子グラウンド」と命名した元小学校グラウンドで、男17名女14名が参加、六組に分かれ個人戦を実施しました。今回も経験者が多く、プレーにも余裕が見られ、和気あいあいゲームを楽しんでおられました。

「成績」(敬称略)

男子優勝 山田忠雄 (39打)
女子優勝 糸井久枝 (44打)
ホールインワン延6回(4名)
(他の成績は「公民館がいど」でお知らせ済み)

◎七月十四日(日)

四部対抗バレーボール大会

猛暑の続く中「はまの子体育館」に、男子49名女子44名の選手が参加し盛大に開催しました。

今年も女子の部では「打倒三

部」を合言葉に立ち向いました。「勝つ」と文字入りの黒ユニホームを揃え団結力を発揮した三部が圧勝し23年連続優勝をしました。男子は四部が、ラリーにも負けず相手にボールを着実に返し点数を重ね快勝しました。

「試合結果」

男子の部 女子の部
優勝 四部 三部
準優勝 二部 四部
三位 一部 二部
四位 三部 一部

◎八月十一日(日)

四部対抗ソフトボール大会

昨年は雨天のために中止になり二年ぶりに開催しました。今回は時々浜風が吹く猛暑の中55名の選手が集合し優勝めざして熱戦が繰り広げられました。各部年々選手が若がり好守の連続した試合でした。

特に優勝戦では、例年どおり元、現の野球部員をチームに入れ強打、好捕球等若さあふれるプレーが続出し、近年にない名勝負となりました。そのなか連携プレーの勝った三部が「6対1」で前回に続いて優勝しました。

「試合結果」

優勝 三部 三位 一部
準優勝 四部 四位 二部

◎八月十八日(日)

盆おどり大会(地藏盆)

熱帯夜が続く日々涼さを感じる十二夜の月が輝く晴天の下、松原寺境内で今年も子供地藏盆世話人会と同時進行で開催しました。会場には夜店や小学生が撮った閉校前の写真展示やビデオの投影、又毎年お世話になっている「踊り保存会」の皆様の協力を得て、踊りを盛りあげていただき、賑やかな会場でした。

◎九月二十九日(日)

由良地区運動会

小学校の閉校にともない、五回続いた合同運動会を終了、旧来の運動会を開催しました。

それにともない競技種目に「ギネスに挑戦種目」から「長ぐつなげ」ボール送りを変型した「リレーボール」を採用しました。

今年是最初から各種目に高得点を重ねた四部が、対抗リレーを待たずに早くから総合優勝を決め、みごと43年ぶりに優勝旗を手にしました。リレーは力強い応援団の期待に答え三部が優勝しました。

結果は次のとおり

総合 リレー
優勝 四部 (179点) 三部
準優勝 三部 (163点) 二部
三位 二部 (157点) 四部
四位 一部 (148点) 一部

開催にあたりグラウンドの整備に多大な御協力をいただいた皆様に御礼申し上げます。

老後とは

飯澤 登志朗

退職して19年目を迎えた。

先輩諸兄から退職して生活リズムが変わるから2〜3年は要注意と囁かれ、また年金は10年位受給しないと払込んだ掛金の元が取れないと脅かされ、取り敢えず60歳退職、70歳まで生きて年金生活を続ければ後は功銭と考えていた。

幸い、人並みの健康状態で医師と仲良くして、うまく生かされている様だ。

由良地区は、四方先生が高齢と健康上の理由から医院を閉じられ、しばらく無医地区となり不安な時期があった。何とか地域医療の確保をと活動が起こり住民の強い要望が行政を動かしJA跡地に診療所がオープンとなった。

高齢化率が宮津市内でも高い由良地区にとって堀川先生や職

員の皆さんの親身で明るい対応に訪れる看者さんの笑顔が絶えない。

私は、今年11月で満80歳になる。しかし由良全体から見れば「何！80、まだヒヨコや」といわれそう。今年も敬老会の案内をいただき参加出来た。

由良地区で該当者は約三百人弱、当日の出席者は90人程度で、約1/3である。自治連合会長を始め関係者の皆さんに感謝したい。

当日は、升田自治連合会長の挨拶で開会、会長から苦難の時代を過され地域振興に努力された先輩に感謝を申し上げたい。

また、今年めでたく米寿を迎えにられる方は21人であり、長寿を心からお祝い申し上げたい、と祝ってくれた。

次に宮津市長から米寿を迎え

られた方々に記念品の贈呈があったが以前に比べて自らの足で記念品を受領される方が多くなったと思う。

井上市長からは、皆さんが戦前戦中、戦後を生き抜いてこられたから現在がある。皆様のご苦労の賜物、感謝したい、現在の宮津市の高齢化率は36%であり元気な宮津市の為にも今後とも健康で協力を願いたい。

由良の特別養護ホームは27年3月頃にオープンが予定されているが地域の活性化と市の再建にご協力願いたい。と祝詞があった。

毎年由良小学校児童が祝ってくれていたが、今年初めて栗田小学校3年生がお祝いに来てくれた。由良の子供たちが栗田の友達と一緒に演奏し、歌ってくれた。誰もが歌ったあのメロディー「富士山」。

『あたまを雲の上に出し四方の山を見おろして

かみなりさまを下に聞く

富士は日本一の山』

思わず一緒に口ずさんでいた。

敬老会閉会後の語り合いも楽しい、元氣そうやなア、毎日何し

とるん、だれだれさん今年顔見んかった、孫のお小使い大変やで、畑の草引きだけ等々、日頃の生活を話合いながら帰路についた。

特に浜野路夕月サロンの発表うれしかった。息の合った皆さんの発表はすばらしかったがそれ以上に亡姉が名付け親の夕月サロンが明るく活動されていることに亡姉を想い出していた。

小学校校舎は今秋にも取り壊される予定であるが、寂しいばかりでは先へ進めない、後に出来る特養ホームが地域に活力を呼び明るい地域が醸成されることを願うのみである。

何年か前に、病気になるのは本人の不養生だ、と発言した政治家がいた。すぐに謝罪し発言を取り消したが、何も病気になるたい

から不養生しているわけではなく、一生懸命働いた結果の発病であったり、生まれつき病弱の場合もある。

前に書いたように、生かされていると思うのか、生きなければならぬと思うのか、あるいはもうどちらでも良い、迎えが来たら仕方ないとあきらめるのか、そんな事を思う日も確かにある。しかしだれもが共通して思うことは皆に(家族に)迷惑を掛けずと思うことだろう。

話題を少し変えよう。

5、6年前の「公民館だより」に「もったいない」と寄稿したことがある。

ノーベル平和賞を受賞されたケニアのワンガリ・マタイさんが「もったいない」という言葉に感激されたことである。

先日の毎日新聞(余録)に、公開中の映画「もったいない!」は欧州、アフリカ、米国、日本で廃棄食料の実態や背景を追い、問題

の根深さを描いている。

世界で生産された食料の1/3、約13億トンが毎年捨てられる。

賞味期限や消費期限によって我が家でも捨てることがある。

私が一番食べたい盛り頃は戦後の食糧難でナンパン粉やヤシ粉のパン、味もないし、とに角腹を膨らせば良しとする頃であった。一粒の米もむだにするな。ばちがあたると教えられた時代である。芋の茎も食べた、今では芋の茎は珍味として重宝されているそうだ。

食べ物を捨てれば資源と労働力がむだになり、地域温暖化も加速させる。映画は「先進国で捨てられる食料があれば世界中の飢えた人を3度救える」と語りかける。

ちなみに消費期限とは、弁当や洋生菓子など長く保存出来ない食品に表示され、賞味期限はハム等期限内においしく食べられる、期限を過ぎても食べられないと

は限らない保存のきく食品に表示されている。

話題を老後に戻したい。

退職して何をやるのかと当時は夢も色々あったが何も物になつたことはない。

趣味といえるかどうか、囲碁だけは続いている。月刊誌(囲碁研究)だけは10年以上購読してページだけは捲っているが頭の中に記憶は何も残らないし、次の対戦に一向に役立つことは残念ながら全くない。

「碁敵は親の死に目に逢えない。」そんなことを聞いた事があるが残念ながら「親孝行したい時に親はなし」の方が当て嵌まる。

BSテレビでご覧になつた方もあると思うが、過日俳優の榎本孝明氏と由良岳へ登る機会があつた。

雪舟の有名な「天橋立図」は由良岳から観て書いたのではなにかとの設定でスタッフ同道で案内したが、皆なスタスタと登る

し、案内役が一番後からの参加であったが有名なタレントと一緒に山頂で写真に収まる機会は二度とないだろう。

歩くことが大切と本で読みテレビでも観るが実行出来ず三日坊主で終わっている。

由良の歴史をさぐる会のメンバーとして地域の歴史を研究したり、宮津市の移動図書館で借りた本を手当り次第に読んでみるが頭には入っていない。

それでも自分なりに達成感を味う日もある。

旅行をしたい。字も書いてみたい。歴史を知りたい。碁も強くなりたい。美酒も味わいたい。

これは欲なのか、しかし生きてる以上当り前ではないだろうか。由良には北前船に乗り日本中を駆け廻つた歴史が残されている、勇気と根性に敬意を表しながらもう少しだけ生きていきたい。

さて、次は何をしようか!これが老後かも知れない。

由良は北前船の船主と 船頭の豊かな村だった

中西 六右衛門

宮津市は今北前船サミットの誘致に頑張っているが、その中で北前船の船頭についての話が出た。由良では以前から古老による船頭の話には事欠かなかつた。どうも由良地区は北前船の船頭の輩出地区であったようであり、数多くの船頭が由良を始め岩滝地区、宮津地区の北前船で活躍した様である。・迄は分かってはいたが、先日ある人に教えられた文献と宮津市の北前船セミナーで由良村は船頭だけでなく多くの「北前船の船主」さえ居た豊かな村であった事が分かった。

そのセミナーで島根県の浜田港に入港した北前船の船数は江戸末期（1744年）から明治中期（1901年）にかけて

の約150年間で岩滝が述べ67隻、宮津が25隻に対し由良は149隻以上と圧倒的に多く、入港船名数も93隻と群を抜いている。その中で私の先祖の新屋（あたらしや）六右衛門の持船が文献に因ると最初の入港が寛政2年、西暦1790年に始まり、明治22年西暦1889年迄の99年間に13隻の浜田港入港の記録が残っていた。同時代由良の船で米屋（？）の船が1811年文化8年から1882年明治15年の71年間に26隻も入港している。

この北前船に因って由良村には多くの富や産物、文化が集積したと推察され、昔話の由良の千軒長屋は本当であったと私は思える様になった。しかし、

この船主達は北前船の衰退と共にどうなったか？これからの研究課題と思う。

他方、この北前船で活躍し由良に多くの富をもたらした船頭達の事にも少なからず関心が生まれたので、地区の古老や私の祖母（昭和46年西暦1971年94歳で死去、明治28年西暦1895年由良へ嫁いで来た）や母（平成16年西暦2004年92歳で死去）から聞いた話を中心に諸処推察を入れつつ少しまとめた。

まず祖母と母から聞いた話では、由良の船頭連中は中々優秀であった様である。その証か「由良の千軒長者」との話もあり、田舎としては結構豊かであり又都会的であった様である。由良の夏蜜柑は山口県萩から持ち帰り、由良蜜柑は九州から持ち帰った温州蜜柑とか、由良に多く有った素麺や乾麺の技術と小麦も北前船の産物とか・・・

祖母からは、船頭連中は春になると一連隊となって刺し子の「どてら」を着て、わらじを履き徒歩で浪速（大阪）の湊へ行った。そこから舟に乗り、北は松前（北海道）から秋田、酒田、新潟、佐渡等を経て山口県萩を通り、時には九州唐津、有田迄行き、大抵は馬関（下関）から四国の金比羅神社へ参り小豆島を経て浪速の湊へ帰って来た。木津川？の川下（真水域）に舟を繋ぎ陸路、刺し子の「どてら」に荒縄の帯を締め、群れをなして帰って来た、と聞かされた。威勢のいい連中だったそうなの。春から冬迄男の居ない由良では、催事の主体は女であり結婚式や葬式には「どてら（縋袍）」を着て差配をふるって居たそうなの。結構怖くて威張っていたそうなの。

何時の頃か確かでないが、船頭連中は由良を離れ、組をなして諸外国へ働きに行ったよう

ある。話のよると・・・

*朝鮮組の有田、山田組は土木建築業で成功をし、由良から何人も関係者を呼んで頑張ったが、第2次大戦の敗戦で全てを残して帰国したようである。

*台湾組は沢井市造翁の関係で大成功をし、沢井組大阪本社、台北支社を作り特に鉄道建設にすぐれ日本と台湾の鉄道建設で沢井組が関係していない所は無駄と言われた様である。丹後由良一の成功者であった。その功績は由良小学校、由良神社等多数である。同時代沢井組で成功した小室桑(久米)蔵氏も由良地区の為に尽力願った。私事ながら私の大祖父、祖父と2代に亘り教育には熱心で、沢井等氏と共に火事で焼失後の小学校再建にも協力し由良教育、由良野球と言われた程由良を有名にした。

*南洋組は小松組の様で、小松姓を中心に南洋に渡り真珠採り

やゴム園に関係したようである。成功し故郷に錦の一環で由良小学校に南洋の珍しい剥製や標本を多数寄贈されており、我々も理科標本室へ入るのが楽しみであった。

*アメリカ組は、中西、岸田、榊田等であった様で、榊田市兵衛氏は5トン積みトラックを初め4台の自動車を持ち帰り「市兵衛ゴットン」と呼ばれてトラック運送業を日本でもやっていた。中西、岸田組は戦争の関係で帰国したが、アメリカでは煙突掃除業や洗濯屋等々使用人を使い各種の商売は成功したが戦争の関係で止む無く帰国したとか。家に行くと言ったの応接セットや日本には無い色々の道具や珍しいものがあつたと記憶している。

船頭たちは夫々舟を降りた後、海は我が庭と作った資産の幾ばくかを持って諸外国へ渡って行き、夫々に成功したが戦争

等諸般の事情で由良へ帰国したようである。その船頭たちの諸外国での出来事は、失敗成功は別にして是非聞き残したいものである。私事になるが北前船に関係しある程度の資産を作り天保3年(1832年)酒屋を始めた5代目新屋(あたらしや)六右衛門の跡を継いだ私の大祖父7代目と祖父8代目は、乞われて由良小学校の建設や焼失後の再建に本館一棟を寄付する等多大の協力を為し、教育は国を作ると由良教育のため村長を筆頭に優秀な校長を招き、独特の由良教育を行い優秀な人材を輩出したと聞く。

他方京都の学校を出た祖父は野球が大好きで由良小学校の野球に多大の協力を致し有名選手を輩出したそうである。その一人の大森寅一氏は由良小から京都商業、満州鉄道と進み社会人野球選手として活躍したと聞く、氏には晩年迄由良少年野球

に尽力願ったものである。大森氏本人から私の祖父には特別可愛がってもらったと話していたのを思い出す。立教大学の塩田投手もその一人かと思う。

又、大祖父は合わせて由良神社の建設、府会議員であった祖父と一緒に宮津線の由良經由運動、観光地由良の企画、別荘誘致、観光地としての整備等により良人として一緒になって働き京都の丹後由良海水浴場に仕上げたようである。大祖父は他方公共事業にも多大の協力を致し、由良郵便局の開設と運営、由良電報電話局の開設と運営、共に明治政府の意向に添って協力した様である。(昭和6年の昭和風土記、昭和7年の現代名士伝記全集、昭和36年の京都府議会歴代議員録等による)

勿論私の大祖父以外にも由良人は優秀で、経済財政は沢井市郎氏と六右衛門に、行政は中西孫兵衛氏と大森清四郎氏と両輪

にて由良に尽くし、先人の新宮
 涼庭翁は医学の道にて現京都府
 立医大の基礎を作り、由良船頭
 たちは世界に羽ばたき、由良教
 育を受けた多くの人材は日本各
 地で活躍されたようである。同
 志社の事務長を務められたと聞
 く磯田氏もその一人で、今も同
 志社の臨海学校が由良川河口の
 丘陵に有る。

由良を思う心ある方々によ
 り、これほどだった由良、忘れ
 去られようとする由良の歴史を
 書き止め、温故知新と頑張つて、
 今最後とも思える変化しようとして
 いる由良を、自信を取り戻
 し、新しい由良にする切っ掛け
 を作って欲しいものである。
 追記(聴き書きが多く、聞き違
 い思い違い等お許し下さい)



明治頃の由良の湊

ゆらゆら散歩

由良岳に登ろう

宮本川端純子

由良に移り住んで十年。海、
 山、川に囲まれ、蛙や虫、鹿の
 鳴き声を聞き、月の明るさを感じ、
 満天の星空に心癒される。
 街の国道沿いで生まれ育った私
 は由良に来て初めて四季の移ろ
 いを肌で感じる事ができた。
 そしてもっと自然を満喫したい
 と五年前からは山登りを始め、
 昼休みにはポツカトルを兼ねて
 由良岳を中心に歩きまわってい
 る。毎日のように歩いていると、
 日々景色が変わっていき、新た
 な発見がある。いつも今日ほど
 んな出会いがあるだろうと心お
 どる。今回はこの半年間の出会
 いについて書こうと思う。由良
 岳はご存じのとおり魅力がいっ
 ぱいだ。

山笑う春、雪どけを待って由

良岳に登る。春の楽しみはピン
 クの可憐なイワカガミとミツバ
 ツツジ。二合目あたりにはイ
 ワカガミが群生しており、近く
 にはミツバツツジも咲き、振り
 返れば由良の青い海が望める。
 また東側のお大師道にも両者が
 咲き誇っていて、寒い冬が終わ
 り一気に華やぐ。お大師道には
 道から外れた所にはなるが、K
 TRの鉄橋が望めるビューポイ
 ントもあり、お花見をしながら
 のんびり列車を待つのも楽し
 い。由良岳登山道では次にタニ
 ウツギが楽しめる。木々の間か
 ら由良川が見えていた景色も暖
 かくなるにつれ、下界は見えな
 くなり、鮮やかな新緑に覆われ
 る。

山滴る夏、五く六合目の斜面

一面に山あじさいが咲き誇る。山あじさいを分断するかのよう
に林道が横切り、興冷めだが、
一面ブルーに覆われ、見ごたえ
がある。また登山道のあちこち
にきのこが生える。鮮やかな赤
やオレンジ、茶色やまっ白なき
のこ。色々な形や柄のきのこが
次々に生える。

山装う秋、台風一八号と猪が
掘り返した影響で、台風直後に
登ると登山道は荒れている。倒
れた枝をよけながら登って行く
と、今まで水のなかった沢筋を
ザーザーと音をたてながら水が
勢いよく流れていく。東峰と西
峰の間の鞍部には小さな緑色の

柿や山梨が無数に落ちていた。
漆原からの林道を使って植物の
調査に来ているという女性二人
組に出会う。落ちた実などを拾
い、木々をゆつくり観察してい
る。木曜の午後から登りだした
ので、平日の昼下がりに山頂近
くで人に会うとは思わず、お互
いにびっくりする。

季節は進み、木々は色づき始
め、鹿の鳴き声が頻繁に聞こえ
る。

山眠る冬はもうすぐ、今まで
冬の間は由良岳への散歩は控え
ていたが、今年の冬はワカンを
つけて登ってみよう。また新た
な発見があることだろう。

お庭に花を咲かせましょう

小西 衛

今回の作文は、「牧歌的な作文」
を意識して、果敢にもチャレン
ジしようと思います。それと

もに、聞き取りした話（ノンフィ
クション）と作り話（フィクショ
ン）を混じり合わせて、書いて

まいります。よろしくお願い申
し上げます。

中西衛邸には、三十坪の庭園
があります。このお庭は、中西
邸（由良・脇）の東側にありま
す。そして伝統の香りを漂わす、
由良地区・「脇 公民館」を垣
根の外側に控えていますね。そ
れに家々も都会とは違って、ま
ばらに建てられていますので。
青い澄んだ空も流れゆく白い雲
も、庭園の外に大きく、鮮やか
に見える事ができます。そしてま
た、鳥達も♪チュウ・チュウ・
チュウと鳴きながら飛んでゆく
様子も気配も、見て感じる事が
出来るのです。彼は、昭和五十
年に家を立て替えるのです。が、
サザンカやキンモクセイの白
色、黄色の花達が、その秋に咲
いていたそうです。しかしなが
ら、彼に聞いたところでは、京
都で勤務していた頃は、たまに
由良の実家に帰って来た時など
に、自分チのお庭を見ても、さ

ほど良い気分になると言うほど
では、無かったようですね。（若
者だったからです！）そしてそ
れに、誰かに苗木を貰らって、
それをお庭に植えると言う事も
無かったのです。（自主的な人柄
なんです！）もっぱら、自分で
植えて育ててみたい樹木や草花
などは、『白鳥園芸』まで出掛
けて行って、気に入ったものを
買って帰り、植えていたそうで
す。けれど、けれどですよ、中
西衛さんにとっても、人間、毎
年少しずつ『年』をとって来
る分けて、『壮年期』に入って
来る事になります。『若者』は
『音』に強く（たとえば、現在の
四十・五十・六十代の世代だっ
たら、若かりし頃『ザ・ビート
ルズ』だの、『ローリングスト
ーンズ』やれ『デュープ・パープル』
など、『音楽家達』の「LP盤レ
コード」が、シャリシャリ、シャ
リシャリと異音が出てしまうま
で、聞いてそれから唄っていた

人々も多くおられた事でしょう。また、現在の十・二十・三十代の世代だったら、人気アイドルグループ、『スマップ』・『嵐』・『AKB48』、「ええと他に誰れがいる?」「んー!ボクには分からない。御免!」)それに比べて、『壮年期』の方々は、『音』に弱くなつて来ますでしょ。(たとえば、議論ひとつを取り上げてみましても、誰れかが意見を言った場合にでも、『ちょっと皆んな!もつと静かになろうよ』、『静かに話をしようよ』、『責任者に任そうよ』と。言う人もなかには、いらつしやるかもしれません。ボクは壮年期に一步、二歩入ったところですよ。それだからと言うんじゃないですよけれど、♪『細川たかし』さんの『矢切りの渡し』イデスね。男子と女子の声の使い分けが、最高ですね。ただ、ただ、でも壮年期の皆さまに敬意を表して、「発言」をするならば『静けさに勝る強さなどなし』と、

言つたところですよ。さらに『壮年期』は、寂びしきにも強くなつて来ますでしょ。『若者』は、寂びしきに弱い分けです。一本文のテーマに関連して、重要だと思つたので、『壮年期』を、もう少しだけ書きます。『壮年期』対『若者』の時代は、終りを告げたようです。現在は『壮年期』対『壮年期』の「戦い」になっていきます。だから日本国は、当分の間、壮年期の時代が続くと、ボクは考えています。だからそこで、壮年期の方々の若者に対する『思いやる心』が、逆に大事になって来るのではないかと思つてなりません。『たとえば、子ども達に、若者達の未来のために』と。声高に言つておられる、壮年期の方々が、おられるならば。どうぞ『若声』にも、傾けて『投票所』に足を運んであげてください。特に、二十才未満選挙権がありません。)

庭園』の話に、スカット戻します。壮年期になった中西さんにとつても、『年』とともに、だんだん、だんだん、この「中西庭園」が「小楽地」になつて行つたのでは、ないのでしょいか。現在はもう彼は、この自分の庭園を見るたびに、心の『いやし』として、『小楽地』として、数種の樹木や草花を見ながら、心が休まる『我が家』があると感じていると思つてなりません。そしてまた、家のカーテン、それから窓を開けて机に向かつて、椅子にゆっくり座つて、丁寧に読書されていて、その事に疲れたときなど、目を遊ばせたい、心を静かにしたい。そんな時、生き生きしている樹木・草花の生気は、この上のない『いやし』になると思つてなりません。庭園という場所は、仕事疲れのビールといつしよで、『元氣』を取り戻して来れるのでしょ。

冬に、彼にしろ、読書の皆さまにしろ、カゼをひいて、寒気に悩まされ続けて、しかも、雪が積もり、樹木たちを見る事すらできなくなるとします。寂しくなりますね。しかしやがて、必ず、必ず春が来て、樹木たちと花たちが芽吹いて来て、庭園を潤して来ます。そしてそのときには、「こんなカゼぐらい」樹木や草花の芽とともに自分も健康になろうと、思うのに違いないでしょう。そんな生き生きとした時間、偶然にも、白い蝶と黄い蝶が、「舞踏会」を始め出し、仲よくお庭で隠れんぼをして遊んでいます。そして二羽の蝶が垣根から花をあさるように見て、ともに仲よく恋人同志のように花を尋ねながら飛びかい、飛びまわり、花の香りを探しながら、その樹木たちの芽に止まっています。ところがですよ、しばらく羽を休めるのかと思えば、低い垣根を起えて隣りの庭々を巡り、再び舞い戻って、松の枝

にひらひら、ひらひら、止まっ
て。そしてそれから、風に吹か
れながら、しかも高く吹かれな
がら、向こう側の屋根に隠れて
しまいました、とき。このよう
な風景。みんな、みんなホッペ
がほほ笑んで心が和みますネ。
そしてそれから、田などに栽培
している、レンゲ草の花が咲き
誇っている季節が過ぎて、ホト
トギス・クマ蝉が鳴く季節が訪
れる頃には、赤いバラ・白いバ
ラがお庭に咲いて、鮮やかな色
の花を見て、臭いが良い花を嗅
ぐ事ができます。みんな、みん
なホッペがほほ笑んで心が和み
ますネ。しかしながら、中西衛
氏は、僕に強調されましたが。
この『中西庭園』の見所は『石
燈ろう』と『飛び石』にあります。
彼は、きつときつと、満足しな
がら、せき払いを「おほん！」
として、自慢気にお庭を見る事
があるのでしようネ(笑)。空
が晴れている日などは、気晴ら

しがてらに、自慢の飛び石を踏
み踏み、小さな虫を取ったりも
しているのでしょうか。やがて、
台風が季節が嫌でもやって来る
のなら。この風は、激しく吹き
あれて来て、安らかに眠ってい
る。良い夢を見ている。そのあ
くる朝、びっくりして眠から覚
めてみると。庭園になにやら、
異変を感じて、何かあったのか
と庭をのぞき見すると、今まで
ちやんと茂っていた、樹木の数
本が折れていたりしますね。し
かし、その時は、仕方がない事
だと、諦めかけるのです。が、
この日は空は晴れて気持ちが良い
く、さらに、やや秋を感じ初め
ていたので、なおさら気持ち良
く、バケツに水を一杯入れ
て来て、湛えて湛えて折れ残っ
た、樹木の泥を洗ってやるので
す。されど泥がついた先は、ツ
ボミが腐っていて、もう花が吹
くことはない、がっかりした
りします。何事もなかつ

たのは「松」だけでしたよ、とか。
八月下旬、「中西衛邸」のお庭は、
サルスベリのピンク色の花が、
満点の星のごとく咲き、お庭か
ら見た秋の空は、夕日に雲が赤
くにじんで見えていますよ。僕
は、気分が良くなって来ました
よ。「牧歌的な歌を唄おう！」「よ
し！拓郎を唄おう」
♪「風は緑の中で 夢を誘うが
ごとく 川の流れはゆるく 心
やすめん 君の黒髪に似て 草
の匂いやさしく 木立鳥とたわ
むれ すべてがまどろむ春には
我が家を大地に根ざさん 谷
間に愛を育てん はぐくむ未来
のすべては せせらぎとなり歌
となる 芽ばえた命とともに
我が家の歌を歌わん(全曲・詞)
『我が家』／詞・曲・歌―吉田
拓郎
※拓郎さんは、『言葉を大事に
する音楽家ですネ』天才でしょ
う。
※次回の作文は、「慕情」です。

人間は、生まれてこのかた、恋
から始まったと思えてなりませ
ん。壮年期の僕の恋は、なんだ
か人に優しくなれそうで、ただ
それだけで。せめて「やさしさ」
だけは持ち続けていたい。寂し
い人を見てそう思った。照れく
さいけれど。カッコ悪いけれど。
書こう。

※作文協力者

○中西衛氏 聞き取りとお庭の
見学。彼は、少数精鋭十一名で、
活躍されている「由良の歴史を
さぐる会」のメンバーでもあり
ます。ポジシヨンは、庶務です。
会長は、皆さん、ご承知の飯澤
登志朗氏です。

○みーちゃん 作文アドバイ
ザー 以上二名です。「ありが
とうございました」 こういう
人間関係から、友人が生まれて
こなければ、いけないと思う。
いろんな人間関係からも。

宮津番傘川柳会

大森 美智子

郷愁の 原点だらう 祭り笛

海は青 定年讃歌の 釣り舟よ

行間を 埋めると愛が ほと走る

机上論 汗を知らない 農政よ

黄落へ ホーム新設 ちらほらと

川柳

坂本 妙子

哀しみの 深さ家族の 愛で埋め

結び目が 堅すぎ 自立出来ない子

気取りすぎ 自分自身を 見失う

物言わぬ 背中が 何か語りかけ

○折込み都々逸

おしまい

お 老の儂さ

し しみじみ想う

ま まだまだ消せぬ

い 命の灯

はつこい

は 恥かしいなど

つ つくづく思う

こ 濃い目の紅を

い 意識して

応援歌Ⅱ

(鉄道唱歌のメロディー)

矢谷 浩作

1 海山川に 囲まれし

風光明媚な 丹後由良

昇る朝日を 身に受けて

現れ出でる 応援団

2 涼しさ運ぶ 浜風よ

季節を彩る 由良ヶ岳

麓を走る 汽車の音

グラウンド響くは 応援歌

3 遠く離れて 幾年か

まぶたに浮かぶは 故郷の

姿優しき 稜線と

沖の白波 深情け

4 照る日曇る日 雨の日も

友と通いし 学舎よ

多くの思い出 ありがたう

在りし姿を 忘れない

我等は濱野路 応援団

(由良地区運動会で披露)

太平洋戦争について ①

脇中西 衛

日本はなぜアメリカに敗けたんだろう、何故戦争に突入したんだろうといつも考えていた。

敗因の第一は工業生産力の差であった。例えば日本とアメリカの軍艦の建造隻数を比べて見ると一九四〇年〜一九四五年の実績は戦艦二対一〇、正規空母九対三一、小型空母九対八九、巡洋艦五対四九、駆逐艦三一対三九七、護衛艦三二対五〇五、海防艦九六対一七一、潜水艦一三四対二二三ともものすごい差である。

第二は科学技術、兵器生産技術の差、日本でも優れた兵器、酸素の魚雷、零戦、戦艦大和等があったが、アメリカの電波兵器、レーダー、VT信管(近接起爆信管)、音響技術(ソナー)、大型航空機B29、原子爆弾、等には敗けた。

第三は戦略思想、考え方の違いである。勝ち戦の時の戦果の拡大である。日本人はそこそこ成功するとこれくらい勝てばもう引き返さしていいたろうと思つて徹底的に進むことをしない。例として昭和16年12月8日の真珠湾攻撃のときと、昭和17年8月8日の第八艦隊のガダルカナル突入の大戦果のときがある。

「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」「翔鶴」「瑞鶴」6隻の大型正規空母、戦艦「比叡」「霧島」「重巡」「利根」「筑摩」軽巡「阿武隈」駆逐艦9隻、潜水艦3隻、油槽船7隻の機動部隊が真珠湾を目指した。

第一次攻撃隊は水平爆撃隊の97艦攻49機、雷撃隊の97艦攻40機、降下爆撃隊の99式艦爆78機、制空隊の零戦35機、合計167機です。淵田総指揮官は「我奇襲ニ

成功セリ」トラトラトラと打電した。約一時間後に発艦した第二次攻撃隊は水平爆撃隊の97艦攻54機、降下爆撃隊の99式艦爆78機、制空隊の零戦35機、合計167機です。対空砲火の激しい中大戦果を挙げた。撃沈が戦艦5隻、大破3隻、航空兵力は銃爆撃で炎上せしめたもの45機、撃墜せるもの14機。未帰還機は第一次攻撃隊が雷撃機5機、降下爆撃機1機、戦闘機3機の合計9機、第二次攻撃隊が降下爆撃隊が14機、戦闘機6機の合計20機である。

軍令部から来た命令は奇襲攻撃後直ちに撤退すべしですから、機動部隊はその後直ちに引上げた。ところが連合艦隊は徹底的に撃破せよと命じた。軍令部命令の方が上だから南雲はそちらをとった。第二撃をやってもあまり効果はなかったという人もいる。なぜなら爆煙がひどくて下の方がよく見えなかった。燃料タンクは半地下

式で見つけるのがむずかしかった。海軍工廠もどれが無傷なのかわからず命中させるのがむずかしく、対空砲火も激しくなつて来たから、おそらく損害が大きく100機以上落されるかもしれない。等々色々な見解があるが、私は第三波、第四波をやるべきだったと思う。一ヶ師団ないし二ヶ師団の陸軍を連れていって占領すべきだったという人や、索敵を十分にやつて真珠湾のすぐ西にいた、空母エンタープライズ(ハルゼー座乗)をやつつけるべきであったという人もいるが、それは少し欲張りというものだろう。山本司令長官が「南雲ではようやらんだらう」といったとゆう話も残っている。

次に昭和17年8月7日にアメリカ海兵隊第一師団一万八千名がガダルカナルへ上陸して来た。アメリカの反撃の第一歩である。

三川軍一第八艦隊司令長官は、重巡「鳥海」に将旗を揚げ

ラバウルを出撃した。重巡「青葉」「衣笠」「加古」「古鷹」軽巡「天龍」「夕張」駆逐艦「夕風」が続いた。全部で8隻である。駆逐艦が少ない、ほとんど巡洋艦ばかりの寄せ集めの艦隊であった。

8月8日の夜第八艦隊の8隻の三川艦隊はガダルカナルのサボ島南方から突入した。間隔の広い単縦陣で各艦独立の砲雷同時戦を展開したが、距離も近く砲弾も魚雷もよく敵艦に命中し大火災を起こさせ、豪重巡「キヤンベラ」が沈み、米重巡「シカゴ」が大破した。最初の合戦は6分間で終り、左方に転舵しサボ島の東側を北上したら3隻の重巡と2隻の駆逐艦に会敵した。約20分位の戦闘で米重巡「ヴィンセンス」「アストリア」「クインシー」の3隻を沈めた。駆逐艦「タルボット、パターン」は大破である。我が方は「島海」「青葉」が少し損傷したのみであるから、文句なしの大勝

利であった。

しかし日本艦隊は敵艦隊を撃破したことですっかり満足して、作戦の第一目標である敵輸送船団30隻以上に対して一指もふれることもなく、引き揚げてしまった。「島海」の早川艦長は再突入を強く意見具申したけれど司令部は受け入れなかったのである。山本長官も不満だったといわれている。

再突入しなかった理由は、アメリカには空母がいる、翌朝になれば艦載機を飛ばしてくるかも知れない。ところが戦後になってわかったのだが空母は後方に避退していて近くにはいなかった。又闇夜であるため輸送船団の位置がわからなかった。色々理由をいっているが、輸送船団撃滅がいかに重要な意味を持つているかがわかっていなかった。18日に一木支隊九〇〇名が上達し、21日に攻撃したが、一万八〇〇〇名の海兵隊と戦って勝てるはずはなく全滅した。

昭和17年8月より昭和18年1月までの5ヶ月間のガダルカナルの飛行場をめぐる争奪戦の勝負が太平洋戦争、日米戦の勝敗を決定した。

8月24日航空母艦瑞鶴、翔鶴を中心とする機動部隊が米機動部隊交戦、エンタープライズに相当の損害を与えたが、もう1隻のサラトガは無傷だった。我が方は龍驤が沈没した。

その後日本の船団による陸上兵力の増援は不可能となり、小數づつの陸軍部隊を駆逐艦に乗せてガダルカナル島へ送り込む事になった。米軍側ではこれをトーキョー・エクスプレス(東京急行)と呼んだ。

10月11日サボ島沖海戦があった。第6戦隊、重巡「青葉」「古鷹」「衣笠」駆逐艦「吹雪」「初雪」相手の米軍は重巡2隻、軽巡2隻駆逐艦5隻で、サボ島北西海面で奇襲攻撃を受けた。「青葉」は大破し五藤長官は死亡。「古鷹」は沈没、「吹雪」も

沈没した。相手は駆逐艦一隻沈没、重巡一駆逐艦一大破のみある。米軍はT字戦法の形を取り、レーダーを使って夜戦における主導権を取った。日本軍にとって夜戦は日本の方が強いと思っていたので、シヨックであった。

10月13日、翌日の高速輸送船団戻入に備えて戦艦「金剛」「榛名」による飛行場砲撃が実施された。飛行場沖合いを一時間半往復して、各艦8門の36センチ砲を撃ち込んだ。零式弾(榴霰弾) 189発、一式弾(徹甲弾) 625発、三式弾(焼夷弾) 104発、使っている。米軍の資料では、基地所在の小型機90機中42機、大型機8機中2機が破壊されたのである。

三式弾がパーツと燃え上がるので火の海に見え、なかには燃料タンクに当たって爆発を引き起こすので飛行場壊滅と思ってしまう。ところが、射撃終了が午前一時で、米軍は午前六時半には飛行場を使用してきた。滑

走路補修用の鉄板をダットと敷いて大穴でもすぐに塞いでしまった。

「金剛」「榛名」は撃ち込んだら、サーツと引き上げてしまった。本当はあそこに居すわって間断なく砲撃を加え、丸一日飛行場を使用出来ない様にして、その間に高速輸送船団で陸軍兵力を揚げればよかった。

向うには戦艦がなかった。新鋭戦艦「ワシントン」「サウスダコタ」が出てくるのはもう少し後で、空母も「ホーネット」ただ一隻しかなかった。「大和」を出そうかと山本長官は言っていたようだ。どうして彼は強行しなかったのだろうか。

渡辺(安次) 戦務参謀がやめましよ長官と山本長官の袖を引いたといわれている。

10月14日飛行場砲撃の翌日、増援部隊将兵と重火器、糧秣、弾薬を満載した日本高速輸送船団6隻が無事ガダルカナル島の泊地に到着した。さっそく揚

陸が開始されたが、輸送船は鼠輸送とちがってすぐに泊地を離れるわけにいかない。15日朝には至近距離の敵飛行場から爆撃機が来襲する。虎の子の高速輸送船のうち3隻が失われ、逃げ戻った3隻の輸送船中2隻は人員のみを陸揚げしただけだった。飛行場を飛び立って五分もしないうちに、眼下に日本の上陸船団がいるわけである。だから非常に効果的な行動をアメリカ側はとれていた。結果的には戦艦2隻の砲撃もなんの役にも立たなかった。

山本長官が「大和」を出そうといった時、本当に連合艦隊の総力をあげて、「大和」「武蔵」「陸奥」「長門」等を出動させていたらと思う。

8月31日伊号第26潜水艦はガダルカナル南東海面で米空母「サラトガ」を襲撃し、魚雷を命中させている。その修復のため「サラトガ」はその後三ヶ月作戦に参加出来なくなった。

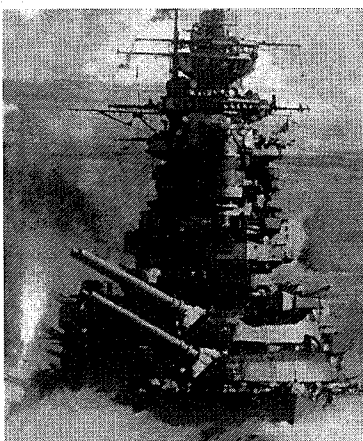
9月15日には伊号第十九潜水艦が米空母「ワスプ」を撃沈した。

その結果、太平洋全域で米軍が作戦に使用できる空母は「ホーネット」1隻になってしまった。この時期、ガダルカナルのアメリカ軍は食料、弾薬不足で悲鳴をあげていたのに、日本軍は攻勢に出られなかった。歩兵第35旅団長の川口少将の部隊が総攻撃に失敗したあとで、攻撃再興どころではなかった。

10月26日に南太平洋海戦が始まった。ハルゼーは「ホーネット」と「エンタープライズ」に新鋭戦艦「サウスダコタ」を連れて出撃してきた。日本艦隊は南雲第三艦隊司令長官が指揮する「翔鶴」「瑞鶴」「瑞鳳」の三空母である。もう一隻第二航空戦隊角田覚治少将の「隼鷹」も参加した。結果は「ホーネット」は撃沈した。「エンタープライズ」は損傷を受けたけれど取り逃した。水上部隊が遮二無二追

いかけ傷ついている「エンタープライズ」を砲撃か雷撃で撃沈するチャンスがあったが、勝ちに乗じて徹底的に敵をねじふせるという気迫がかけていた。我が方の損害は「瑞鳳」「翔鶴」の甲板に損傷を受けたのみで、他の2隻は最後まで無事だった。南太平洋海戦は日本機動部隊最後の勝利であった。太平洋に健在な米空母がゼロになった。一般的に観察すると、とにかく日本側には空母がいるわけだから、まだこちらは不利ではなかった。(次号につづく)

参考文献 P H P 研究所発行「日本海軍戦場の教訓」
朝日ソノラマ発行「連合艦隊の生涯」



山椒大夫外伝(Ⅱ)

—千年超の伝承—

太宰治と「津軽」 鷗外「山椒大夫」

京都丹後学会会長
丹後ふるさと観光大使

坂本与一郎

私ごとで恐縮だが、30代中ば

まで太宰のこの本の存在は知らなかったが、中味までは知らなかった。それを教えてくれたのは行きつけの新宿歌舞伎町の居酒屋の青森出身の若い女将だった。

この作品は36歳の太宰が、昭和19年、津軽風土記の執筆を依頼されて、三週間にわたって津軽を旅行したときに生まれた作品である。この頃の太宰はすこぶる元気で、明るく故郷を旅した。

外ヶ浜のこの一文に至極ごまんえつだったようである。

『一つ、小説の好きな人には殊にも面白く感ぜられるのであるまいかと思われる記事がある

から紹介しよう。

「奥州津軽の外ヶ浜に在りし頃、所の役人より丹後(たんご)の人は居ずやと頻りに吟味せし事あり。いかなるゆゑぞと尋ねるに、津軽の岩城山(いはぎやま)の神は、はなはだ丹後の人を忌嫌(いみきら)ふ、もし忍びても丹後の人此地に入る時は

天気大きに損じて風雨打続き船の出入無く、津軽領はなはだ難儀に及ぶとなり。余が遊びし頃も打続き風悪(あ)しかりければ、丹後の人の入りて居るにやと吟味せしことぞ。天気あしければ、いつにても役人よりきびしく吟味して、もし入込み居る時は急に送り出すこととなり。丹後の人、津軽領の界(さ

かひ)を出れば、天気たちまち晴て風静かに成(なる)なり。土俗の、いひならはしにても忌嫌ふのみならず、役人よりも毎度改むる事、珍らしき事なり。

等にも港々にては多くは丹後人を忌みて送り出す事なり。はばかり人の恨(うらみ)は深きものにや」

青森、三馬屋、そのほか外ヶ浜

へんな話である。丹後の人こ

通り港々、最も甚(はなはだ)しく) 敷丹後の人を忌嫌ふ。あまり

そ、いい迷惑である。丹後の国は、いまの京都府北部である

りあやしければ、いかなるわけのありてかくはいふ事ぞと委敷(くわしく) 尋ね問ふに、当国

が、あの辺の人は、この時代の津軽へ来たら、ひどいめに逢わなければならなかったわけである。安寿姫と厨子王(ずしおう)の話は、私たちも子供の頃(ころ)から絵本などで知ら

岩城山の神と云ふは、安寿姫(あんじゅひめ) 出生の地になればとて安寿姫を祭る。此姫丹後の国にさまよひて三庄太夫(さんしやうだいふ) にくるしめられ

されているし、また鷗外(おうがい)の傑作「山椒(さんしょう)大夫」の事は、小説の好きな人なら誰でも知っている。けれども、あの哀話の美しい姉弟

しゆゑ、今に至り、其国の人といえは忌嫌ひて風雨を起こし岩城の神荒れ玉ふとなり。外ヶ浜

が津軽の生れで、そうして死後岩木山に祭られているという事は、あまり知られていないよう

は船の通行にて世渡ることなれば、常々最も順風と願ふ。然るに、差当りたる天気にははりあることなれば、一国こそつて丹

であるが、実は、私はこれも何だか、あやしい話だと思つて

後の人を忌嫌ふ事にはならぬ。此説、隣界にも及びて松前南部

とか、三里の大き魚が泳いでいるとか、石の色が溶けて川の水も

魚の鱗(うろこ)も赤いとかいうことを、平気で書いている南谿氏の事だから、これは或いは「強ひて其事の虚実を正さず」式の無責任な記事かも知れない。もともと、この安寿厨子王津軽人説は、和漢三才図会(わかんさんさいずえ) 岩城山権現(いわきさんごんげん)の条にも出ている。三才図会は漢文で少し読みにくい。「相云ふ昔、当国(津軽)の領主、岩城判官正氏(ほうぐわんまさうち)といふ者あり。永保(えいほう)元年の冬、在京中、讒者(さんじゃ)の為に西海にたくせらる。本国に二子あり。姉を安寿と名づく弟を津志王丸(づしわうまる)と名づく。母と共にさまよひ、出羽を過ぎ、越後に至り直江の浦云々(うんぬん)」などと自信ありげに書き出しているが、おしまいのほうに至って、「岩城と津軽の岩城山とは南北百余里を隔て之を祭るはいぶかし」とおのずから語るに落ちる

ような工合になってしまっている。鴟外の「山椒大夫」には、「岩代の信夫郡(しのぶごおり)の住家を出て」と書いている。つまりこれは、岩城という字を、「いはき」と読んだり「いはしろ」と読んだりして、ごちゃ混ぜになって、とうとう津軽の岩木山がその伝説を引受ける事になったのではないかと思われる。しかし、昔の津軽の人たちは、安寿厨子王が津軽の子供である事を堅く信じ、につつき山椒大夫を呪(のろ)うあまりに、丹後の人が入込めば津軽の天候が悪化するとまで思いつめていたとは、私たち安寿厨子王の同情者にとつては、痛快でない事もないのである』(太宰治著「津軽」新潮文庫刊より)

寛政年間(一七九五年)に出版せられた京の名医橋南谿(たちばななんけい)の東遊記からの引用の一文だと太宰は云っている。

実際、津軽にはこの姉弟にま

つわる伝説は多い。天保12年(一八四一年)に刊行された「丹哥府志」にも記載されている。

「南津軽郡柏木町(平賀町)の熊野神社に安寿姫と津志王の話がある。

丹後国を逃れてきたこの姉弟は、どちらか早く岩木山に登った方がその神になろうと約束した。柏木町の大坊にある熊野神社までくると、獅子踊りがおもしろく催されていた。二人はこれに見とれていられるうちに、津志王は旅の疲れで仮り寝をしてしまった。姉の安寿姫はその間にいち早く登山して、岩木山の神になった。それから大坊の人達(あるいは小栗山群落)は、岩木山に参詣しないという。

登山道を行くと、山の中腹に姥石という大きな石がある。安寿姫の供をしてきた乳母がここで大石になったという。登山者は、掛けてきたたすきをこの姥石にかけ安全を祈るのだそう

平成24年度 宮津市人権標語入賞作品

- 友だちと うれしいことを半分こ かなしいことも 半分こ (小学2年生)
- 元気よく あいさつ一本 金メダル (小学5年生)
- 支えたり 支えられるから 人なんだ (中学2年生)

だ。

岩木山は明治になるまで女人禁制になっていて、女の登山は禁止されていたが、姥石までくることが黙認されていた。女の神様が同性禁止するとはおかしな話である。そしてもちろん丹後の者の登山は許されないという

「昔から津軽の海が俄に大荒れすると、丹後の船が津軽の浜に入っているからだといつて、深浦を始め港の役人が問屋を調べ、船改めをした。そして丹後の船か、丹後生まれの船頭がいとすぐ国外に追放する定めがあった。丹後の船がいなくなる、たちまち天候が回復したという。これを丹後日和という。」(岡井主税著「丹波・丹後の伝説遍歴」文芸社刊より)

これらの伝承がリアリティがあるのは、日本海側の交易圏のひろがりである。縄文期から明治初期までの沿海州までも含めた交易圏が、より活発であった

という裏付けがあるからである。以下は、古代交流のひとつ。青森も直江津も現代人が考えるほど遠くないのかもしれない。

『宮津市の由良地区は、地名も同一で、同じ日本海の海辺の町として昭和54年以来、山形県鶴岡市の由良地区とお互い行き来するなどの交流を深めているが、さらに共通するものに蜂子皇子の伝説がある。

言い伝えによると、皇子は父の崇峻天皇が暗殺されたため推古元年(五九三年)、都を脱出、丹後の由良から出航、日本海を北上、庄内まで行った。そこで八人の乙女に招かれて由良地区に上陸、皇子は苦行の末、羽黒山に開山したという。

このため丹後由良地区で、「由良の歴史をさぐる会」が「この伝説を大切にする意味をこめて」同地区の照国神社の境内に高さ80センチ幅40センチ厚さ20センチ、黒御影石の石碑を完成させた。

場所は由良川河口近くの海岸

にあり、いかにも船出にふさわしいところ。当事医師で同会会長の四方寿朗さんは「庄内由良と丹後由良の交流を一層深め、丹後の伝説を大切にし、そこから真の歴史や今後の郷土のあり方を考える一助になれば」と話している。(京都新聞平成7年4月13日付より)(京都丹後学講座「丹後隠れ里、由良千軒」参照)

さてそれでは、同じ「いわき」の福島県いわき市はどうなっているのだろうか。いわき市の教育委員会が応じてくれた。

「昭和49年7月、安寿姫厨子王遺蹟顕彰会(いせきけんしゅうかい)(会長成清(なるきよ)マサ子)によって、厨子王ゆかりの金山町(かねやまち)に安寿姫と厨子王母子像が建立された。

建立されたのは、厨子王(政隆)が父岩城判官政道の仇を報じた後、父や姉の追悼会(つい

とうえ)を行い、併せて従軍の

将士の労をねぎったと伝えられる「舞台(ぶたい)」を望む高台で、太田良平作である、台座には元福島県知事木村守江氏の「愛」の文字が刻まれている。

遺蹟の碑文には平易な文章で伝説のあらすじが、次のように記されている。(村上天皇天歴年間(九四七年〜九五六年)のころの話し。)

「今から約千年の昔、平政氏は奥州の賊徒を平定した功によって、岩城の地を賜り、岩城判官と号して住吉御所に住んで当地方を治めていました。

尚、滝尻御所は出城であったと見られます。政氏はこの地に着任すると間もなく、その昔東北地方平定に來られた日本武尊が、東北鎮護を祈願して建立したと伝えられている鳥見野社(この金山台地に在った)が荒れ果てているのを再興したり、附近の浜から砂鉄を運ばせて、良質の粘土の出るこの金山台地

で砂鉄工業を興したりして政治に励みました。

その後、政氏は朝廷への勤めに怠りがあったという事で筑紫(つくし)の国に流されましたが、幸い判官職はその子政道が継ぐことを許されました。政道も父の志を継いで政治に努力しました。その中に政治にゆるみが出たり、それまでの領地の一部であった信夫(しのぶ)地方を失い、一族に不和が生じました。

長和(ちやうわ)5年という年の春、小山田(おやまだ)の桜狩りの帰り道、この金山の丘で逆臣の手にかかり一命を落としたのであります。当時政道には万寿(まんじゆ)という13才になる女の子と千勝(せんかつ)という11才の男の子がいました。

これが、安寿姫と厨子王なのであります。父政道の死後、奥方や安寿姫厨子王母子の身にも危険が迫りましたので、奥方は

忠臣の大村次郎、召使の小笹を伴って、ある夜住吉御所(すみよしごしよ)を脱出し、奥方の実家である信夫を指して逃げたのでありますが、途中追手との戦いで大村次郎は戦死しました。

野に臥(ふ)し山に寝(ね)て主従4名はようやく信夫に着いたのでありますが、そこにも長くは居られません。それに主従4名には岩城再興の末越後(えちご)の直江(なおえ)の浜に着いたのでありますが、ここで山椒大夫(さんしょうだゆう)の者に見つかり、母と小笹とは佐渡への舟に乗せられ(小笹は投身自殺)安寿姫と厨子王とは別の舟に乗せられて山椒大夫の家に連れて行かれ、あの有名な山椒太夫物語でよく知られている苦しい生活が、約3年の間続いたのであります。」

『京の蘭方医』(第一章)

新宮涼庭伝(家系と郷里時代)

新宮 涼 輔

新宮涼庭伝の前に著者を紹介します。山本四郎教授、京都大学文学部史学科(国史専攻)卒。

以前私の父が公民館だより(一九九八年)に記載していますので内容が類似している箇所があるかも知れませんが御了承下さい。私が九才の時でした。小学校四年生だったと思います。その日(昭和三七一年)一九六二年に顕彰碑の除幕式がありました。その時初めて「新宮涼庭」という人物の名前を耳にしたのです。一七八八年(天明七年)由良で生まれ、十八歳で開業したのである。当時小学生だった私は、その人物が幕末の名医だなんて知る予知ありませんでした。数年が過ぎ中学の授業で、

涼庭の名前が出た時、私は何かワクワクした思いがあったのを覚えています。新聞及び雑誌などで目にする様になってからは、少しずつ興味が出てきました。帰省してから少しづつ本を読書し涼庭の伝記を読みながら生まれてから没するまでの生い立ちを調べています。

(出生)

涼庭は、天明七年(一七八七)三月十三日に丹後由良で生まれました。

涼庭が生まれた時、すでに二本の門歯(もんば)がはえていたそうである。衆(しゅう)は驚いて、これは鬼子であるすぐにとりあげてはいけなはいとい、かりに路にすて不祥をはらい外祖母がこれを拾って帰ったのである。若干の伝説化

もあるうと思うが二門齒のことも信ずるにたらないが、当時は、鬼子を一たん棄てて誰かに拾ってもらおうという風習が各地で行われていたようである。

(幼少時代)

涼庭の幼少時代は、幼時より人にすぐれ村内の松原寺の住僧某について続経の句読をうけて、書を学んだようだ。常に僧が諸経を講じて問答するのを謹んで聞き、一たび聞けば忘れなかつた様です。子供達と遊ぶ場合も自ら大将となり衆枝の優劣を差別し、優れたものには、果物などを与え子供達はみな悦服し唯だ命に従ったという。涼庭は常に由良海岸の砂上で子供達と遊んだそうであるが、一人の子供を馬とし自分はその上に乗り、他の子供達をまわりに排列し、意気揚々としていた様である。

(勉学)

十一歳の涼庭は、伯父の有馬涼築の学僕となった。寛政九年

(一七九七)のことである。當時有馬家は、医名の高いにもかかわらず、財政的にはあまり豊かではなかつたようである。涼庭は、調剤の見習いのみでなく、家事労働にも服したようである。しかもかかる多忙の中にあつても、涼庭は勉学を怠らなかつた。涼庭勉学の逸話としては、深夜灯火が漏れて叱責されないように、わずかに点じた線香の火で読書したといい、雨の日は書巻がぬれるのをおそれて傘骨につるし、外出歩行の間も書見を怠らなかつたといわれる。経書の勉学についても十二歳のとき巖^{いづみ}溪^{いづみ}嵩^{いづみ}台^{いづみ}の机前で、『左伝』を讀んでいたが、たまたま鼻水がながれて来たので、これをかもうとしたらしく、鼻紙がなかつたので、『左伝』を破つてかんだ。先生大いに怒つたが、涼庭は書は記憶してしまえば反故に等しいと答えた。先生は、ますます怒つて暗誦せしめたところ、涼庭は一字も誤らなかつたので、

先生は、その神童ぶりに驚いたようである。父(道庵)が放蕩であつたので、涼庭は随分苦勞したようである。そこで伯父の有馬涼築の家に学僕となり、薪水の勞をとつたようである。祖父道郭の長男は有馬氏をつぎ、二男玄民が家業をついだ。涼庭の父は三男である。

(江戸行)

涼庭は享和二年(一八〇二)十六歳の時、従兄丹山の学僕として丹山の君主福知山侯の江戸藩邸に行き、二年後の文化元年に帰郷した。

(郷里開業)

十八歳で江戸より帰郷した涼庭は、ここで開業した。郷里に帰つて両親を侍養すること数カ月で正月になつたというから、帰郷は秋ころであらうとされている。十九歳の正月は、久しぶりに両親と新年を祝つたので喜びにたえず次の詩をよんでいる。

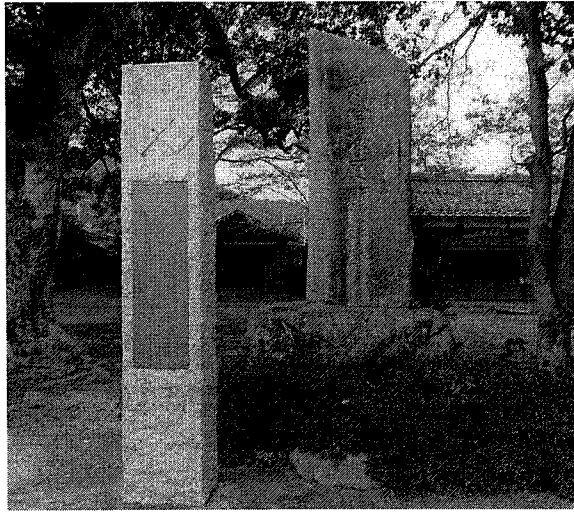
無^ム辺^{ヘン}草木大和伸^{ダイワノノボリ}
慈^ニ親^{シン}同^{トウ}醉^ヰ居^ク蘇^ソ酒^{シュ}
不^フ似^シ前^{ゼン}年^{ネン}客^{キヤク}舍^{シャ}春^{シュン}

居ること約一ヶ月治療を請う者が日々門に満ちた。涼庭は専ら傷寒論・金匱・温疫の三書を考究し、常にこの三書を手にし、自分勝手に注解を下して汗吐下(発汗法と口から吐き出させる)のと、下剤をかけるのとの三法を以て万病に対し、天下の技は、この三法よりほかにないとまで考えたようである。

(涼庭の江戸行と宇田川入門について)

さきに涼庭が江戸に行った時、大槻玄沢に会つたらしい。それは、『新撰洋学年表』天保十年の条に、大槻磐溪曰く、余十二三の時涼庭先生を先人の側に見る。時に先生一介の書生、余童子何ぞ知らん。記す、其議論風生、常人に非ざるのみと。後余西遊、亦接語勿々心事を論ずるに及ばずして去る。とあり、また『驅豎齋詩文鈔』の第

三冊の『与大槻磐溪』には「僕少時嘗で尊公に謁す」とある。これは年次・場所を欠いているが、この両者より推すと、涼庭が大槻玄沢に会っているようである。ところが、大槻磐溪は、玄沢の息子で享和元年の生れであるから、涼庭が十六〜十八歳の間、江戸にいた時は、二〜四歳にあたり、十二三歳の時とはいえない。また磐溪十二・三歳の時には、文化九、十年のことで、涼庭は七年に長崎にむけて出発し、博多を経て長崎に入ろうとするころである。次に宇田川入門の事である。もし涼庭が入門しているとすれば、文化二年から七年までのことであり、涼庭が十九〜二十四歳、磐溪が五歳〜十歳の間である。磐溪の十二、三歳というのも、記憶の誤りを考えれば、生

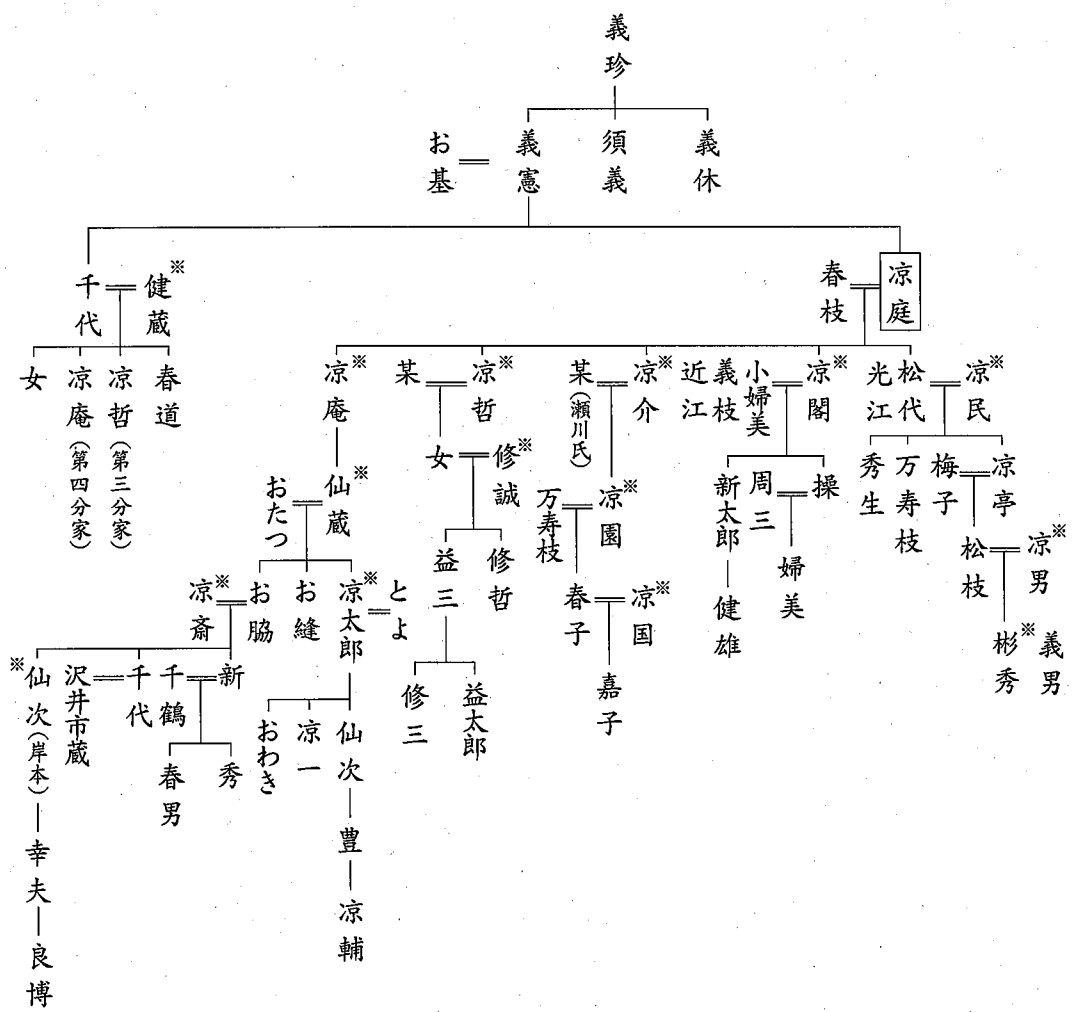


由良神社境内にある
新宮涼庭顕彰碑

きてくる。この時、宇田川玄随はすでに没して(寛政九年)養子玄眞(榛齋)の時代である。なお磐溪が西遊したのは、文政十年の二月下旬のことで、小石元瑞の許に滞在している。この時、涼庭にも一寸会ったのである。時に涼庭四十一歳、磐溪二十七歳である。

新宮家の家系

(注) ※は養子



着任のご挨拶

由良郵便局 局長 梅田浩一

今年、記録的な猛暑となり、また、十月になっても季節外れの暑さが続きましたが、朝夕めつきり涼しくなり、秋の気配を感じる季節になりました。由良地区の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素は、由良郵便局をご利用いただきましてありがとうございます。

長期にわたり、前局長の有本敬様が築かれ伝統ある由良郵便局に、平成二十五年四月一日付で着任致しました。ご挨拶が遅くなりましたが、このたび、公民館だよりを寄稿させていただきました。この場をお借りしてご挨拶とお願いをさせていただきます。

私は、与謝野町男山に住んでおります。栗田を超えて奈具海

岸から見る日本海の景色が好きで、通るたびに美しい景色に癒されながら通勤しています。

郵便局に採用されてから、これまで、野田川、加悦、伊根郵便局で三十二年間、外務一筋でお客様の家庭を訪問し、お客様とお話をさせていただく中で、人生観など自分にとって生きていくためのアドバイスをたくさん教えていただきました。

私にとっては、内務の勤務は初めてで、かなりの緊張と不安をかかえながらの毎日であり、不慣れた窓口業務で大変ご迷惑をおかけしております。しかしながら、皆様には、温かいお言葉をいただいたり、心配りをいただいたりしてありがたく感じています。これからも地域とのつながりを大切に、地域に貢献できる郵便局となるよう努

めてまいります。

次に、郵便局からお願いをさせていただきます。

未だ近辺の郵便局でも、振り

込め詐欺等の特殊詐欺があります。由良地区の皆様にも被害に遭われないよう、お金を「ゆうパック」「レターパック」「宅配便」で送るよう指示されたり、息子さんやお孫さんを名乗る方から、「今日中にお金がある」とか「お金を立て替えて」などという電話があつたりした時には、詐欺の可能性がりますのですぐ振り込まず、誰かに相談するなどくれぐれもご注意ください。

由良地区では郵便局が唯一の金融機関の店舗であります、たくさんの方々にご利用いただけるよう地域と密着した郵便局になるよう社員一同心よりお待ちしております。

今後とも、ご支援、ご愛顧を賜りますようよろしくお願いいたします。

由良音頭

作詞 由良 中西壽子

一、＼由良はよいとこ 潮風うけて

ヨイヤサ ヨイヨイ

山にや黄金のみかんが みのる

ヤレサヨイヨイ みかんがみのる

二、＼由良はよいとこ 情の港

ヨイヤサ ヨイヨイ

沖のかもめも また来てとまる

ヤレサヨイヨイ また来てとまる

三、＼由良はよいとこ 住みよい処

ヨイヤサ ヨイヨイ

虚空蔵ほさつが それ見てこざる

ヤレサヨイヨイ それ見てこざる

四、＼由良はよいとこ 海山川に

ヨイヤサ ヨイヨイ

宝か、えて 千軒長者

ヤレサヨイヨイ 千軒長者

五、＼由良はよいとこ また来てみたや

ヨイヤサ ヨイヨイ

恋の由良の戸 それ花が咲く

ヤレサヨイヨイ それ花が咲く

史料(北前船)提供のお願い

由良の戸 千軒長者の館(足湯)では、内部を改良し展示物を入れ替え北前船の資料室としてリニューアルします。

江戸末期から明治初期、北前船に乗り込み由良の船頭たちは、日本国中を航海し、海運を通して国内の流通に大きな貢献をしてきました。

ご家庭にあります史料を一定期間お預かりし、千軒長者の館で展示、訪問される方々に見ていただきます。

明治から昭和にかけて北前船関係の書類、民具などの提供をお願い致します。責任をもってご返還をいたします。

由良の歴史をさぐる会

ちくと知っ得

由良には由良石は勿論のこと彼方此方に笏谷石が使われている。

金比羅神社の参道や民家の玄関等に多く見られる。江戸時代から明治初期にかけて北前船で運ばれてきたのである。

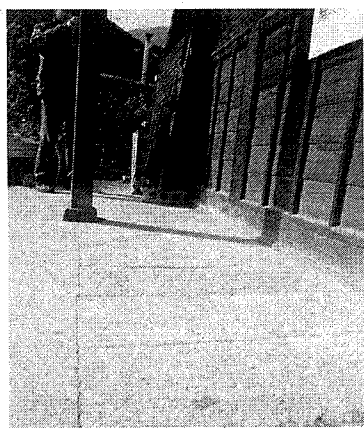
笏谷石は、福井市足羽山附近で採石された石で、きめ細やかでやや青みを帯びた色合いで細工がしやすいのが特徴である。

今まで何気無く見てきた石が遠く北陸から北前船によって運ばれ墓石や手水鉢等細工ものに使われていた。そんな歴史を重ねて見ると又、違った思いが頭を過ぎる。

皆さんの廻りにも見かけるはず、因みに笏谷石は青石と呼ばれている。(飯澤登志朗)



金比羅神社参道



坂下 衛さんの玄関

編集後記

2013 (H25) 10月

毎日のうだるような暑さからやっと解放され、地区内はキンモクセイの香りです。

海面水温の上昇により10年ぶりに大発生の台風26号930hpという大型台風が通り過ぎようとしています。被害が無かったのは幸いです。特別警報という耳慣れない言葉も出ました。

運動会も事故なく35年ぶりに四部の優勝で終了することができました。グラウンドの除草、コースのライン引き、放送装置の点検、万国旗の設置など不慣れなことばかりで大変な苦労をしました。いかに小学校の世話になっていたかを実感しました。

豊作の稲刈りが終了し実りの季節が始まりました。夏が暑いと、冬は早く来て寒いと言います。

そろそろ冬の準備にかかる頃になりました。(枝川)